

高校生F・デザインアワード2014

成瀬さん(東京都大)の作品が文科大臣賞に

最優秀校 3年連続で越谷総合技術高校

高校生や高等専修学校生の創造力と表現力を競う「高校生ファッションデザインアワード2014」(文化服装学院)

産経新聞社主催、文部科学省、全国高等学校長協会など後援、共立メンテナンス(協賛)の最終審査会と表彰式が8月

2日、東京・渋谷区代々木の文化服装学院で開催された。同コンテストは、高校生や高等専修学校生のキャリア形成の一環として、ファッションへの関心を高めてもらうことが目的。8回目を迎えた今年は、全国から2278点のデザイン画が寄せられた。

第一次審査を経て最終審査に残った12点のデザイン画は、同学院服装科2年生のサポートにより実際の洋服に作りあげられ、最終審査はマネキンに着せられた作品を審査する形式で行われた。

審査終了後、大ホールで入賞発表と表彰式が行われた。

最優秀賞の文部科学大臣賞に輝いたのは、東京都大学等々力高校2年(東京都)の成瀬擁汰さんの作品「HuguryなHamburger系女子」。素材たっぷりのハンバーガーを模したボリューム感のあるスカートとカラフルな色使いが印象的な作品で、成瀬さんは「元気にたくさん食べる女の子のリアルを表現しました。製作の過程で服への愛着がどんどん増していき、自分でも大好きな作品に仕上がった。高く評価されて嬉しい」と受賞の喜びを語った(一面・今月の顔に関連記事)。文部科学大臣賞を男子高校生が

獲得したのは初めて。成瀬さんには副賞として奨学金30万円、記念品などが文部科学省専修学校教育振興室の倉本光正室長補佐から贈られた。

優秀賞の全国高等学校長協会賞には岐阜聖徳学園高校3年の里村百合子さんの作品「バスタ」、産経新聞社賞には埼玉県立越谷総合技術高校3年の鈴木里来さんの「ゴリラの結婚式」、文化服装学院賞には栃木県立鹿沼商工高校2年の川崎将さんの「POP CORN」がそれぞれ選ばれ、賞状と副賞として奨学金10万円、記念品などが贈呈された。

高等学校賞の最優秀校を受賞したのは埼玉県立越谷総合技術高校。同賞が創設された2012年から3年連続受賞の快挙を達成した。優秀校には青森県立弘前実業高校、香川県立笠田高校ら5校が選ばれた。

審査員を代表して総評したファッションデザイナーの廣岡直人氏は、「転んだりバランスを取ったりして初めて自転車に乗れるように、洋服もまず作ってみることが出発点。そこから自分の指向が見えてくる。時間のある学生のうちに試行錯誤を繰り返して、新しい世代のデザイナーとして羽ばたいてほしい」とエールを送った。また小杉早苗学院長も主催者あいさつで「日本のファッションは世界に誇れる文化のひとつ。ファッションの感覚や感性を磨くには早い

うちから勉強を始めるのが効果的。ぜひ今から取り組んでほしい」と会場の高校生に呼びかけた。

表彰式終了後には恒例のファッションショーを開催。ファッション工科専門課程の学生有志137人がショーの構成からスタイリング、ヘアメイクなど全てを担当する手づくりのショーは、例年にも増して高い完成度を見せた。なかでもキャバレーをモチーフにしたフィナーレは、歌あり踊りありの庄巻のエンターテインメントショーが繰り広げられ、場内は大いに盛り上がった。



文部科学省専修学校教育振興室の倉本光正室長補佐から文科大臣賞を受ける成瀬擁汰さん(左側) Ⅱ東京・渋谷区代々木の文化服装学院で



文部科学大臣賞に輝いた成瀬擁汰さんの作品

「優秀賞に食べ物が続いたので受賞はもう無理かと。諦めていたから僕の作品が呼ばれたときは興奮状態でした」。表彰式後の第一声はこんなユニークな分析から始まった。

SEGIURIKO」と名づけるのも、「ぶっ飛んだ」と言いたくなる独特の感性だ。周囲を巻き込む明るい人柄も含めて、

ファッションに興味を持つ環境に育った。絵心があることからデザイン画を書くうち、次第に他人の評価がほしいと思うよう

を入れて取り組みました。これで駄目ならきっぱりと諦めるつもりでした」。作品で表現されたのは女の子のリアル。「女性は

にスカートに使う素材の量が膨大で、バランスも含めて製作はとても大変でした」とサポート生の橋井史佳さんは振り返る。発表の瞬間に泣き崩れ、すぐに弾けるような笑顔を見せた2人の姿は、「生みの苦しみが報われた喜びに溢れていた。

「高校生ファッションデザインアワード2014」で
文部科学大臣賞を受賞した **成瀬 擁汰さん**

今月の顔



東京都市大学等々力高等学校
2年在学

「POP CORN」と、奇しくも食をモチーフにした作品が相次いだことを指す。自身の作品タイトルは「HungryなHamburger系女子」。具材たっぷりのハンバーガーを女の子がまとう発想も斬新なら、デザイン画を実作する過程で「お嫁さんにしたいと思うほど作品に愛着がわき、わざわざNARU

スター性を感じるほど「キャラ立ち」している。母も祖母も文化服装学院出身。両親ともアパレル関係の仕事で自然とフ

になり、初めて応募したのが昨年のこの大会だ。「そのときは選外。進路決定が迫る高2の今年が最後の挑戦だと思って気合

食が細いもの」という見方を覆し、ボリュームたっぷりのハンバーガーを元気に頬張る少女をイメージした。それだけに「特

事なのは日々の想いを大切にカタチにすること。皮剥けたデザイナーの卵の将来が楽しめた。(16歳/関連記事5面に)